

支え、共に生きていく

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校 三年 鶴木 つるぎ さくら

「おばちゃん、認知症になったらしいよ。」

中学一年生の終わりを迎えようとしていたとき、父からそう聞かされた。

おばちゃんは、我が家の近所に住んでいる父方の大叔母だ。小さい頃からとてもお世話になった。おばちゃんの家には保護猫がいっぱいいて、小さかった私は猫に会いたくてしょっちゅう行っていた。おばちゃんは私が家に行くと、必ずお菓子やアイスクリームをくれた。それもまた子どもにとっては魅力的。

おばちゃんは、とても明るくて話すのが大好きな人だ。そんなおばちゃんが認知症。身近に認知症の人がおらず、イメージが湧かなかった。

「おじちゃんを『おじちゃん』と認識できずに怖がって家から追い出してしまつらしい。」ますます想像できない。なぜなら、おばちゃんとおじちゃんはとても仲が良かった。それに、いくら認知症でも「夫」である人を忘れてしまうことはあるまい。そのときの私の認知症の理解はその程度のもので、実態を全く理解できていなかった。

ある日、祖父母の家を訪ねると、おばちゃんが来ていた。おばちゃんは祖母と楽しそうに談笑していて、以前と変わらないように見えた。なんだ、と少し気楽になった。

「こんにちは。」

こんな様子だったら、私のことは覚えていないのか。期待を込め元気よく挨拶した。

「えっと……誰け？」

こちらを向いた瞳の光は鈍く、当然、期待は打ち砕かれた。おばちゃんは私を忘れていて、どこか自信なさげだった。私はどう言えばいいのか分からず、黙り込んだ。

「龍太郎の娘だよ。」

すかさず祖母がそう言ってくれた。

「……ああ、龍くんのこと……。」

どうやら父のことはわかるらしい。おばちゃんの目に少し光が戻った。しかし、「私」はいつの間にか「父の娘」ということでしか認識されなくなっている。その衝撃から心を立て直し、会話を続けた。おばちゃんの以前の明るさは影を潜め、どこかおどおどしていた。おばちゃんが別人のようで、怖かった。

しばらくしておばちゃんが帰って行った後、祖母が話してくれた。

「おばちゃんは、認知症が悪化してるんだよね。最近は、家から出てうちに来ることが多いんだよ。」

私は咄嗟に会いたくない、と思った。そして、そう思っている自分がたまらなく嫌だった。

それから、祖母の家に行く結構な頻度でおばちゃんが出た。会う度に、龍太郎の娘、という自己紹介を繰り返すのは、辛かった。

そんな日々を過ごしているうちに、家庭内で祖母のことが話題にのぼった。疲れている、というのだ。祖母は御年七十四歳。最近は一日のうちに何回もおばちゃんが訪ねてくるので話し相手になるのも大変なのだそうだ。

「断ってくれていいんだよ。」

と父。そうは言っても、祖母はおばちゃんを追い返すようなことはなかった。私も祖母の体調が心配になり、一言言ってみた。

「断ったら。」

「今までお世話になったし、追い返すことはできないのよねえ。それにおばちゃんだって大変なのよ。私が話し相手になってそれが支えになるんだったら、それでいい。」

祖母はそう返した。ふと思った。私は今までおばちゃんを支えようと考えたことがあっただろうか。祖母はおばちゃんの認知症を知っても、何も変わらず、話し相手になったり、家に招いたりするところでおばちゃんの心の拠り所となった。対して私はどうだろう。認知症と知った途端、寄り添うどころか、会いたくないとまで思ってしまった。例え一部のことを忘れても、別人のように感じて、おばちゃんであることは変わらないのに。

私はそれまでの自分を省みて、自分にできることはないか考えた。自分から声をかけようと、思った。今までは、挨拶も避けていたが、自分が能動的に動くことで何かかわるかもしれない。そう決意してから、通りで会ったときは必ず声をかけるようにした。

「おばちゃん、元気？何してるの？」

するとおばちゃんに変化があった。最近は名前を思い出せずとも、父の娘とわかってくれるようになった。

認知症。まだまだ入り口かもしれないけれど、私はおばちゃんを通して少しでも理解できるようになった気がする。将来、誰がそうなたとしても不思議ではない。もっと身近な人がそうならないとは限らない。でも、おばちゃんに忘れる不安を抱えながら懸命に生きようとしている。私がしなければならぬことは、自分にできることは積極的に取り組み、支え、共に生きていくことだと思った。

公平な暮らしのために

鵬翔中学校 三年 黒川 蒼太
くろかわ そうた

「平等」と「公平」の違いについて学校で考える機会があった。

「平等」イコール「公平」と思っていたが、先生の話聞いて「平等」は全員を一律にすること、「公平」は一人一人に合わせることはないかと思った。そう思ったのには、きっかけがある。

肺気腫の祖父は二年ほど前から在宅酸素療法を行っている。

旅行好きの祖父があまり外出しなくなったのを見て母は「手帳は取っておいた方がいい。障がい者用の駐車スペースが使えれば、車の乗り降りや移動が楽になる。家の中に閉じこもっていたら筋力も落ちるから、リハビリを兼ねて外へ出よう。」と言った。

逆に祖父は「手帳は要らない。二十四時間酸素さえあれば、まだ日常生活で、助けは必要ないし、咳をするとコロナと間違われそう。周りの目が気になる。」と拒んだ。

母の意見も分かるが、手帳を取得することは、祖父の体力の低下を認めることになる。それに、認定を受けてしまうと一生、障がい者として生きていかなければならない。祖父の気持ちを考えると可哀そうに思えて、取得には反対だった。

諦めない母はヘルプマークを買ってきた。

ヘルプマークとは、支援や配慮を必要とする人が、周囲にそのことを知らせることが出来るマークだ。祖父の咳がコロナではないと分かってもらえれば安心して外出できるようになるだろうというくらいだったが、祖父は周りの目を気にして着けなかった。

医師や、ケアマネジャーの説得もあり、その後、手帳を取得した祖父に変化が見られた。

例えば、以前より外出する機会が増えた。障がい者用駐車スペースに車を止められることで、トイレまでの移動が楽になったし、隣の車との距離が広がったことで、酸素を持つての乗降がしやすくなった。

祖父が障がい者になったことで、これまで自分には関係ないと思っていた駐車スペースが、「公平」とはこういうことなのだ。と初めて分かった。

宮崎に越してきてから元気が無かった祖父は、外出するようになって明るくなった。

祖父との外出先は、早朝の海辺や花見だ。僕にとっては、魅力的な場所ではないが、祖父が楽しそうにしている姿を見ると、僕も楽しくなる。

祖父が、よく笑い、冗談も言うようになったのは、自分の障がいを受け入れたからだと思う。

僕も祖父も障がい者になることに對し、強い抵抗を持っていたが、手帳の取得で、必要な支援を受けられるようになり、祖父は以前より明るく元気になった。

てんかん発作があり、薬を服用している僕に、母がヘルプマークを薦めてきたが、特別扱いされるのが嫌だったから断った。

しかし「高校生、大学生になると、行動範囲も広がるよ。あなたの病気を知らなくても、ヘルプマークを見て、助けてくれる人がいるかもしれない。」と言われ、ヘルプマークに對して興味湧いてきた。

自分にとって助けになる物だと考えると、利用してみようかなと思うようになった。

僕は、眼が悪いから眼鏡をかける。てんかんだから薬を飲む。祖父は、呼吸器疾患があるから酸素吸入をする。脚の筋力が落ちていいるから車いすを使う。ただそれだけのことなのに、僕と祖父が障がい者に対して持っていた「かわいそう」という気持ちは、偏見だと反省した。

祖父が障がい者手帳を取得する時、福祉サービスに関する情報提供が少ないのに驚いた。

例えば利用できるサービスを冊子にしたり、掲示物を増やすことで、多くの人が制度を知り、理解することができると思う。障がい者や高齢者にも分かりやすい情報発信の工夫の必要性を感じた。

「思いやり駐車場」について調べるまで、祖父が持っている利用証に、種別があることを知らなかった。本当に小さなことだが、必要な人にとっては、ありがたいことだ。

涼しくなってきたら、祖父とのんびり釣りにでも行きたい。弁当でも食べてゆっくり過ごしたい。祖父と色々な場所に行ってもっと思い出を作りたい。

障害者のおじちゃん

尚学館中学校 一年 若生 陽菜乃

ドーン。

何かが玄関のドアにぶつかると音がした。きっとおじさんが来たんだろうと思い、席を立ててドアを開けようとする。それより先に入ってきたおじさんが、

「やあ、ぶつかってしまっただ。」

と言っているように笑っていた。

おじさんは私の祖父の友達で、視覚障害者だ。おじさん曰く、若い頃は目が見えていたのだが、年を取るにつれだんだんと見えなくなり、二十年ほど前にとうとう見えなくなってしまったらしい。原因はよく分からないそうだ。

おじさんは、杖を使わないし、盲導犬も飼っていない。祖父の家に遊びに来る時は大体タクシーを使って来るのだが、たまに市役所に用事があったりすると、そのまま歩いて祖父の家に遊びに来る。杖を使わずに、だ。一体どうやって周りの様子を確認しているのか、歩くことに不安を感じないのか。考えれば考えるほど不思議に思えて、本人に聞いてみる。すると、市役所からこの家に着くまでに、どこをどう歩けばいいのかを覚えていくらしい。市役所の中から出て、横断歩道を渡って、大きな駐車場の横をまっすぐ進み、また横断歩道を渡る。すぐ横にある標識にぶつからないように注意しながら二十歩歩いて一段上がり、今度は祖父の車にぶつからないように注意して五歩進むと祖父の家の玄関なのだそうだ。

「いつもこの五歩進む所で間違えて、ドアに頭をぶつけるとよね。」
と笑っている。私は、

「市役所の前は階段や花だんがあつて、そこから出てくるだけでも難しいのに、横断歩道を二つも。しかも、一つは信号機なし。どうやって渡るんだろう。それに、歩数も数えていたの。」

と、ますます不思議に思い、頭をドアにぶつける程度のケガしかしていないことに、おじさんの人間としての潜在能力を感じ、むしろ少し感動してしまうほどだ。

ある日、私は、

「そもそも、何故杖を使わないんだろうか。」

とふと思ひ、今度は祖父に聞いてみた。すると、おじさんは目の見えていた頃の事が忘れられず、自分が健常者でないのが恥ずかしいと思っっているそうなのだ。その上、祖父やおじさんの家族が何度、

「杖を使うのは当たり前で、恥ずかしいことじゃないよ。」

と言っても、聞かないのだそうだ。私はおじさんの考えがよく分からず、考え込んだ。障害者であることは恥ずかしいと思うほど悪いことなんだろうか。何故おじさんはそう思うようになったんだろうか。もしもこの延岡市がもっとバリアフリーの街になったら、おじさんのそんな考えは無くなるのだろうか。

さまざまな疑問が浮かんだが、おじさんに直接聞くのは止めておいた。譲れないことや人に触れて欲しくないことは誰にでもあるだろうと思っただからだ。だから、私は、おじさんに寄り添うことに決めた。立ち止まって困っているなら声をかければ良いし、杖を使いたくないのなら使わなくていいと、私は思う。

おじさんにお茶を出すとき、私が

「おじさん、お茶どうぞ。」

と言いつつ、

「いつもありがとうね。」

と言いつつ湯のみを手探りで探しているおじさんに対して、私はお茶の入ったコップをテーブルにコツンと音を立てて置くことで、おじさんにコップの場所を知らせるようにしている。すると、おじさんはすべにお茶を飲み、

「うん、このお茶は美味しいねー。」

とほほ笑みながら言う。その笑顔を見るたびに、私はおじさんが外でもこんなふうに笑えるようになるという、と思う。

おじさんは、移り変わる季節を感じながら、いつも楽しく生きている。いつか障害者が自分が障害者であることを恥ずかしがらず、堂々と生きていけるような社会になってほしい。今日も、祖父と楽しそうに庭いじりをするおじさんがいる。

「どうやって種をまく場所を覚えているの。」

それを聞くために、私は一歩踏み出した。

自分らしい輝きで

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 田中 李実 たなか りみ

「一四六力国中一一六位」

みなさんは、この順位が何を表わしているか分かりますか。これは、世界経済フォーラムが今年発表した、男女格差指数の日本の順位です。この記事を新聞で目にしたとき、私は強く衝撃を受けました。

私は小学生のとき、よく男の子と遊んでいました。放課後になると待ち合わせをして、公園で木登りや缶蹴りをしたり、少し遠くまで行って探検をしたり……女の子同士で集まって誰かの噂話をするのも、ずっとずっと楽しかったからです。しかしある日、そんな私を大きく変える出来事がありました。休み時間に私が本を読んでいると、クラスメイトの女の子から、

「ねえねえ、もしかしてさ、李実ちゃんって『男の子といるのが好き』なの？」

と聞かれたのです。少し離れた所からは、その女の子とよく一緒にいるグループの子たちがチラチラ私を見ていました。

『男の子といるのが好き』

一緒だと楽しいし、気が合うし、新しい発見もたくさんできるからなのに、どうしてそんなことを言われなきゃならないんだろう……私が言葉を返せずにいると、その子は

「あ、別に深い意味はなくて、悪口とかでもないからーただ気になっただけだよー」

と言って、友達のところへ戻っていきましました。今思えば本当に深い意味は無かったのかも知れません。それでも、当時の私の心にはその言葉が深く刺さりました。そして数日後、さらに追い打ちをかけるようなことが起こったのです。

クラスで帰りの会が終わったとき、担任の先生から

「ちょっと話があるから残ってて。」

と言われました。そしてその話とは、私が男の子とばかり遊んでいるが故のものでした。教室に誰もいなくなると、先生は

「李実さん、正直に答えてほしいんだけど、誰かからいじめられてない？」

と言ったのです。全く心当たりが無かったため理由を尋ねると、思いがけない答えが返ってきました。

「だって、李実さん男の子とばかり遊んでいるでしょ？遠足の時も男の子のグループと李実さん一人だけでお弁当食べてだし……だから、女の子から仲間はずれにされてるんじゃないかと思って、心配で……」

もちろん私に女の子の友達がいなかった訳ではないし、むしろ多い方だったと思います。それでも男の子と遊んでいるだけで「いじめられているのでは。」と思われるということが本当にショックでした。

これらことは、「女はこうあるべき」とか、「男はこうあるべき」とかいう固定観念から生まれたものだと思います。最初に述べた通り日本の男女格差は大きく、その主な原因が女性の参政率の低さにあります。今年の日本の国会での女性議席数の割合は九・七％で、G7と呼ばれる先進七カ国（フランス、アメリカ、イギリス、ドイツ、日本、イタリア、カナダ）の中では最も低くなっています。

また、日本の性的少数者の割合は約十％で、これは血液型がA型の人と同じくらいです。私が以前インターネット上で話したことのあるトランスジェンダーで同学年の友人は、

「周りの友達も家族もこのことを受け入れてくれているし、普通に接してくれる。一番辛いのは、過度に気を遣われること。」

と言っていました。最近は「LGBT」という言葉も社会に浸透して、あまり抵抗がなくなっているように感じます。それでも差別の芽が消えた訳ではなく、性的少数者へ向けた心無い言葉があるのが現状です。

私達はみんな違って、誰一人として同じ人はいません。肌の色、髪質、好きな物と嫌いな物、家族構成や生い立ち、そして恋愛対象など……違うからたくさん衝突も起るし、辛い思いをする人も少なからずいます。違いを認めて手を取り合おうとは容易ではないけど、悲しむ人が少しずつ減ると思います。

「女らしい」「や」「男らしい」「ではなへ」「自分らしい」を大切に、すべての人がそれぞれの色で輝ける未来になってほしいです。